題材・教材名	領域・教科
【見通しをもった課題を見つけるための「発達表」作成のための方法】	【重複障害児の実態把握および課題の設定】

【手指発達基準表】

			Ⅰ　基本運動
			1．上肢の運動
step1		0:0	□手を口へ持って行く。
			□手と手を触れたり打ち合わせたり
		0:4	□腕を胸や顔の方へ挙上する。
step2	前期		□肘を曲げたり伸ばしたりする。
			□おつむてんてんをする。
		0:5	□手を頭上に置く。

◇基本の使い方

1　広Ｄ－Ｋ式視覚障害児用発達診断検査

Ａ　各下位検査の発達年齢を算出する。

Ｂ　発達輪郭（レーダーチャート）を知る。

2　広Ｄ式各種発達基準表

①　Ａを参考にして発達段階のｓｔｅｐを見つける。

②　①で見つけたｓｔｅｐにある項目が観察指導の段階で「該当する」か「該当しない」かをチェックする。

③　各領域でチェックされた項目の数や内容から現在の段階として一番適当と判断されるｓｔｅｐの段階を「今できていること、今できつつあること」の段階とする。

④　③の段階の前のｓｔｅｐを「すでにできていること」の段階とする。

⑤　③の段階の後のｓｔｅｐを「次に課題になりそうなこと」の段階とする。

3　発達表の作成

⑥　③④⑤の段階の項目をそのまま表として作成する（そのｓｔｅｐをそのままドラッグする）。

⑦　⑥の項目について再チェックをする。

⑧　現在取り組んでいる課題について、適当かを判断する。

【エクセル操作ができるデータ】

a　広Ｄ式運動発達基準表

b　広Ｄ式概念発達基準表

c　広Ｄ式手指運動発達基準表一試案

d　広Ｄ式言語発達基準表

e　広Ｄ式社会性発達基準表

f　広Ｄ式身辺自立発達基準表

◇指導のねらい

生活年齢に比較して発達の未熟さを示す幼児児童の指導の場合、中心となる課題は何か、今取り組むべき課題は何かを見つけることはとても重要なことであるが、観察だけに頼っていると指導の見通しをつけにくい。

客観的に実態を把握する方法として各種の発達診断検査があるが、本ヒントでは、視覚障害児用発達診断検査を基に、課題をどう設定したらいいかを具体的に示す。

◇指導の評価

1　本グループでは、発達基準表をエクセルで入力し直した。それを利用し、現在の発達段階を含めた前後３つのｓｔｅｐをドラッグすることで、容易に発達表の作成ができるようにした。

2　この発達表を作成することで、次の２点が可能になった。

①現在取り組んでいる課題が実態に即したものであるか判断でき修正がしやすくなった。

②次に課題になるであろうことが予測でき、保護者にも明確に課題を伝えることができた。

3　今回使用した発達診断検査は視覚障害児用であるが、これを他の診断検査に置き換えて領域を探れば「発達基準表」については一般のものなので、視覚障害以外の場合も、「発達表」を作成することができると思われる。それによって、現在の課題に対する検討と見通しを持った指導を確認できると考えられる。